

アンリ・ボスコ 天沢退郎

訳

シルヴィウス



シルヴィウス



アンリ・ボスコ

天沢退三郎

訳

アンリ・ボスコ (1888～1976)

南フランスのアヴィニョン生まれ。幼少年時を郊外の田園地帯で過ごす。グルノーブル大学とフィレンツェのフランス学院で学んだ後、アルジェリア、イタリア、モロッコなどの高等中学校で教員生活を送り、晩年は南仏にもどった。この間、多数の小説を発表し、南仏の自然や風土を鮮やかに描きだしつつ象徴性にみちた幻想的物語世界をつむぎ出した。邦訳には『バスカレ少年の物語』五部作(天沢退二郎訳 福音館書店)、『ズポンをはいたロバ』(多田智満子訳 晶文社)がある。

天沢退二郎 (あまざわ・たいじろう)

1936年、東京で生まれた。東京大学フランス文学科卒業。詩人、フランス文学者。明治学院大学教授。

著書に評論『幼想の解説』、童話『光車よ、まわれ!』(以上筑摩書房)、詩集『地獄にて』、評論『宮澤賢治の彼方へ』『エッセー・オニリック——アーサー王・ボスコ・銀河鉄道の夜』(以上思潮社)など、訳書に、ジュリアン・グラク『大いなる自由』(思潮社)、ジョルジュ・バタイユ『青空』(晶文社)などがある。

シルヴィウス

1988年11月29日 第1刷発行

定価1800円

著者 アンリ・ボスコ

訳者 天沢退二郎

発行者 新井忠行

発行所 新森書房

〒150 東京都渋谷区宇田川町2-1-520

電話 03(770)5579

FAX 03(770)5804

印刷所 ベクトル印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

©TAIGIRO AMAZAWA 1988 Printed in Japan

ISBN4-931207-10-3 C0097 ¥1800E

シル
ヴ
イ
ウ
ス

Henri Bosco SYLVIUS 1948

Japanese translation rights arranged
with Editions Gallimard, Paris through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

多くの名前はメジャンといって、メグルミュー一族とは姻戚関係でしか結ばれていない。けれど、いったんメグルミュー家とつながりができると、たとえそれが純粹に精神的な絆にすぎなくても、その結びつきは切り離し難くなる。一族から放射する魅力によって、そしてまた、人の心を取りこにする情熱によって、かれらはあなたちを一族に結びつけてしまうのである。なぜなら、かれらはそっくり、心そのもの、家族そのものだからだ。《百の心、ひとりのメグルミュー。百人のメグルミュー、ひとつの心》と、フィロメーヌ伯母さんは好んで繰返す。メグルミュー家にあつては、人々は一族こぞつて愛し合う。感動するのもみんな

一緒。不幸であれ幸運であれ、それがメグルミュー家のひとりに降りかかるるとき、百人の顔が驚愕したり、ほころんだりする。それどころか、そうした悲しみや喜びのつよい感情が、家系樹に沿ってさかのぼることさえしばしばである。百年も前に死んだ人々を、現在のメグルミュー家の人々に降りかかったばかりの事件——幸運にせよ不運にせよ——に平気で立ちあわせたりするのだから。

ささいなことでも小枝のさがふるえたりするこの家系樹は、のびのびと時間をさかのぼり、空間にひろがり、活々したメグルミュー家の根を沃かな土の中へさしこみ、強力な滋養をそこから吸い上げる。つまりこの心優しい人々は、粘りづよい生命力に恵まれているのである。メグルミュー家の一人一人が、それぞれに自分の目、鼻、眼つき、息使いをもっていて、それはたしかにメグルミュー一族の目であり鼻であり、眼つきであり息使いでありながら、かれらはやはりそれぞれに、いとこのバルナベ・ド・メグルミュー・ルフオールであり、バチルドおばあさんであり、ジョワシャン伯父さんである。いとこのバルナベはたしかにバ

ルナベであり、バチルドおばあさんはたしかにバチルドであり、ジョワシャン伯父さんはたしかにジョワシャンである。誰もかれらを他のいとこや、他のおばあさんや、他の伯父さんたちと混同することはない。それは、こんなにはっきり区別ができ、こんなに独特なメグルミュー一族の人々を、やはり人数が多く繁栄しているマロシュ・ボルド一族や、みんなワシ鼻をしている、もっと数が少くて密集して暮しているブルガール一族と混同したりしないのと同じことだ。

とはいえ、メグルミュー家はさらに二つの種族にわかれる。田舎のメグルミュー——これが本家である——と、町のメグルミューと。私は他の場所で田舎の種族について語った。^{〔注〕}町の一族の方は、いまでも半分は田舎風を保っている。なぜかという、かれらの住んでいる町、ポンティヤルグは、実際のところ、治安判事がひとり、巡査が四、五人いて、ブルジョワの家が数軒あるだけの、富裕な大きな村にすぎないからだ。人々はそこで安樂に暮らしている。判事は、のんきに書類を枕に昼寝してい

〔注〕『マリクロー』において。

るし、ポンティヤルグの住人はみんな穏やかな氣質なのだ。駐在所ものんびり休日気分。ブルジョワの家々も灯が消えかかっている。但し、メグルミュー家は別である。なぜなら、村の人口千六百のうち、メグルミューの苗字をもった法律上完全なメグルミューが百十五人、そして、苗字は異なるけれども、婚姻関係によってメグルミューの血の入っているのが同じ数だけいる。あわせて二百人をこえている。少くとも三十戸の屋根が、冬になると、それぞれの短い煙突から、ポンティヤルグの空へ、三十本の青らんだ煙をたちのぼらせる。メグルミュー家の煙は、こまやかなハシバミの香で^{かおり}それとわかる、と、メグルミュー家を敬愛する善良なポンティヤルグの人々は言う。そしてメグルミュー家の人々も、住民のこの好意には十分に酬いているのである。

そんなわけで、メグルミュー家の者は決してこの故郷を棄てることがない。息子を寄宿学校^{コレージュ}へ、娘を修道院へ出したりはする。ところが、息子たちも娘たちも、勉学の終る日がくると、生家へ舞い戻ってくる。するとみんなは、そんな子どもたちを一家の在所に快く落ち着かせてやる。

それぞれに仕事を与え、机や、鞆を持たせたり、また別の子らは、葡萄畑や、果樹園を拓いたり、材木の伐採に従ったりする。そしてこうした仕事はすべて、近郷から外へ出ることなく、親の家に住んだままでできるのだ。娘たちはかならず早婚である。こんなに心優しい一族にあつては、そうでなければならぬ。《優しい心は、とても待てない》と、メルミュー家の格言にもある。賢くて情の深いこの娘たちは、とても品のある魅力的な母親になる。ヴァランティヌ・ド・メグルミュー・メルキは、四十歳で、六人の子どもがまわりついているけれど、その肌艶、美しくなめらかな頬、紺碧の瞳、つややかなさくらんぼ色の唇はいまだに人の心を惹きつける。それほど、メグルミュー家の者はいつまでも若いのだ。ぼくはあやうく彼女に恋してしまうところだった……。

もちろん、恋しても口には出さない。なぜなら、結束が堅固で、変事を恐れているこの一族と、何らかの関係ができると、そんな破壊的な感情を言葉で云い表わすなどということは、誰にも考えられなくなるから

だ。一族にとって、変事が始まるのは町の入口である。メグルミュー家の
の人々は、ほとんど旅をしない。ポンティヤルグから外へ出ると、胸が
しめつけられ、目がうるんでくるのだ。ここから二十軒も離れると、み
んな、ホームシックにかかる。ポンティヤルグではあんなに愛想がよく、
あんなに陽気なメグルミューが、丘ひとつ越えた向こうのトラヴィニャ
ンでは、もう顔ぜんたいがしかめ面になる。かれがついにあきらめて出
立するのは——どうしても仕方がなくなった場合——長々と遅らせたあ
と、それでもできるだけ速度の緩い乗物である。最後まで、メグルミュー
家の人々は乗合馬車を利用した。《これなら、ゆっくり、身体を馴らせる
でな》と、ロミユアルド・ド・メグルミュー・ラルノーは説明したもの
だ。乗合馬車がなくなると、もっと荒々しい乗物に乗らなければならな
くなった。それで、かれらの生来の旅嫌いはいよいよはつきりとつのつ
たものだ。出立するのがいろいろ便利になればなるほど、いよいよかれ
らは旅に出なくなった。それでも、漠然と、旅心にさそわれて、思いき
ってメグルミューの地平線を越え、隣りの地方を訪れて、大きな町に一

ヶ月以上も滞在する者もいたが、そんな連中も、——ばくは断言していい——帰って来ると必ず、ポンティヤルグの低い鐘楼を見て、深い安堵の溜め息をもらすのである。そしてもう二度とかれは旅に出たりしない。そんな気持はさらさらなくなってしまふのだ。一族が自分の国に執着することは、あたかも腕が肩に着くごとくである。そこから引離そうとするのは、肉と骨を引き剥がすことにひとしい。今日でも、かれらはこんなぐあいなのである。つまり、いつも時代錯誤で、頑固で、変ることなくいきいきして、数が多く、自分たちの名と、従兄弟や従姉妹や、伯父や伯母や、祖父や祖母の血筋全体につよい愛着をもつて暮している。この血筋は、大きな、そして暖かな脈動に息づいて、素朴な信仰と、親しみのこもった善意と、忘れ難い金言の数々を放射するメグルミューの魂のまわりに、力強い枝のようにひろがっている。

ポンティヤルグの人々はこう語る——

メグルミューの知恵は

分別、善意そして美徳。

そして、実際に、メグルミュー家の人々は賢いのだ。かれらの呼吸は誠実そのもの。義務を果すのも楽しみながら。かれらの話はとても感じがいい。こうした長所はゆるぎがなく、良識のしるしがきちんとついている。

けれども、良識良識と、それだけにこだわるならば、メグルミュー一族について不完全で平凡な観念を抱くことになるだろう。

なぜなら、メグルミュー家の人々は、夢見るからである。

かれらはみんな、夢を見る。どんな小さな者も大きな者も、老人から幼児まで、かれらは夢が好きなのだ。というのも、悪い夢を見ることはないか、あってもほとんど稀れだからである。驚くべき恩恵によって、かれらの夢に出てくるのはさわやかな庭園、さえずる鳥たち、上天気ばかり。メグルミューの良き眠りへとまぶたが垂れると、すぐにそんな楽

園へ入りこむ。眠りは九時頃にやってきて、そんな甘美な夢の世界を通り過ぎると、毎朝、さしそめる朝日の下に置いて行ってくれる。こんなわけで、かれらは夢を見たあとで不快な思いをすることは無い。だって、目を覚ましたときには、さわやかな庭園と、さえずる鳥たちと、美しい空とにこやかな人々がちゃんと待っているのだから。かれらは夢の庭から昼の生活の庭へと、ほとんど意識することなく移動するのである。

二つの楽園をへだてる囲いがあるとしても、そんなものは、花づなで飾られた小門をくぐって、楽々と通り抜けられる。そんな小門を通ってあらゆる夢がやってきて、メグルミュー家の人々が眠らずにいるとき、その暮らしをさまざまな想像上のイメージでみたす。その上さらに、同じ小門から、今のとは逆方向の動きに従って、現実の側の肉体が、夢の中へと入りこんだりもする。だから、夜、眠りながら、メグルミュー家の魂は、ブリジット伯母さんやアントワーヌ伯父さんがいかにも親しげに、星をちりばめた六枚の翼で黄道帯をとびめぐるふしぎな天人たちと料理や現金化の話をしているのを耳にしたり、かと思うと真昼間、食事

の時に、大天使たちがテーブルについて、メグルミュー・ラボットおじいさんがパンをちぎるのを眺めているのが見えたりする。メグルミュー家の人々は、こんなふうに、良識が非現実で現実が空想であるような、ふしぎな世界で、何のこだわりもなく暮らしているのだ。

そこから、かれらの旅行熱と旅行嫌いが由来している。熱の方は、ひどい出不精から説明できる。旅に出ることを夢見るのは、決して旅に出ないからだ。旅嫌いの方も、一家の同じ好みから容易に説明できる。かれらの良識——とてもデリケートな——が教えることは、いつの日か出立してみたところで、どこにもたどり着けないだろうということ。せいぜい、駅を見るぐらいが関の山だ。ところで、かれらは冒険というものにあこがれている。英雄的な、宿命的な旅立ちによって冒険を編み出すことができるものだから、かれらは三十戸のあたたかな屋根の下で、好きなように、冒険をつむぐのである。冬、足を暖炉にあぶりながら、痺れるような暖かさと魔法めいたかたちの燠の変化からくるまどろみ——これは驚異をよびますのにとっても適している——のうちに、じ

つとしたままで官能的に心の静穩をゆさぶってくれる土地や人物たちを創り出す。かれらは自分でも弁えているように、分別をそなえている。

《わたしたちのところでは、自分の夢をちゃんと押さえてるからね》とフイロメーヌ伯母さんは言うのである。そしてメグルミュー・タルデルは——この人はとても変っているのだけれど——こんな賢い格言を口ぐせにして喜んでいる——《夢は一つの想念にすぎない。そのように扱ってやらねばならぬ。つまり、われを忘れるようになったら、夢をストップすることだ。》どうやって夢をストップするの？ と訊ねたら、こう答えるだろう——《目をさますのさ。メグルミュー家の人間は、いつだってあわやというときに目がさめる。われわれは目ざめの勘が働らくからね。》

これはまさにその通りである。メグルミュー家の人々は、夢に入るとき、夢見る者と夢とを台無しにするような、正気ならぬしぐさをする前に必ず夢から出られるという、確信を抱いているのである。

